

森田裕之『ドゥルーズ＝ガタリのシステム論と教育学 —— 発達・生成・再生 ——』

稲田 祐 貴

1. 教育学におけるドゥルーズ研究の状況

本書は、2012年に京都大学に提出された著者の博士論文「ドゥルーズ＝ガタリのシステム論の教育学の再構築——生成と流動の教育学のために」を加筆修正したものである。ドゥルーズ (Gilles Deleuze) とガタリ (Félix Guattari) の哲学に触発されて書かれた書物は数あれど、教育論として結実したものはこれまでほとんどみられなかった。本書のような、ドゥルーズらの哲学を教育学的な意義を含むものとしてとらえる試みがみられるようになったのは、つい最近のことである。

代表的なものをいくつかあげると、邦語文献としては本書と同時期に刊行された、山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学——超越論的経験論の生成と構造』(人文書院、2013年)がある。山森はドゥルーズ哲学の形成過程を「学び」(apprendre) 概念に焦点をあてて追跡した上で、学びの経験の理論化こそがドゥルーズ哲学の眼目であったとする。山森の論攷はドゥルーズの博士論文まで(1953年-1968年)を扱うものであるから、本書が主に扱うガタリとの協働作業期(1972年-1980年)とあわせれば、ドゥルーズ哲学のかなりの部分が教育学の問題圏で読まれうることがわかる。

海外においては、Inna Semetsky and Diana Masny eds., *Deleuze and Education*, Edinburgh University Press, 2013を英語圏におけるメルクマールのひとつとみなすことができるだろう。収録されている論文のテーマは、芸術教育、数学教育、理科教育、教室空間論など多岐にわたっている。また、編者のひとりであるSemetskyはドゥルーズ＝ガタリが独自の意味を込めた「生成変化」概念に注目しつつ、テューイやローティの哲学との比較を行っており、その成果は*Deleuze, Education and Becoming*, Sense Publishers, 2006や*Nomadic Education: Variations on a Theme By Deleuze and Guattari*, Sense Publishers, 2008などで知ることができる。

2. 章構成

本書は五章構成である。第一章では本書の概略が示される。第二章では、ドゥルーズ＝ガタリの哲学に触発された自然観が語られ、続く第三章ではその自然を基礎にして成立する社会論が語られる。第四章・五章では、その社会論に教育論が接続され、「教育とは何か」という問題への解答が提示される。各章の具体的な構成は以下の通りである。

第1章 〈教育〉という謎

1. 「教育とは何か」という問いによって本書を起動させる
2. 「教育とは何か」という問いに答えてきた教育学とその問題点
3. 「〈教育〉とは何か」という問いの再定立——問題提起
4. ドゥルーズ＝ガタリから〈教育〉の再定義へ——本書の構成

第2章 ドゥルーズ＝ガタリの自然理論の再構成

1. 〈表現としての自然〉と〈質料としての自然〉
2. 〈質料としての自然〉は〈表現としての自然〉へと地層化する
3. 〈表現としての自然〉は〈質料としての自然〉へと脱地層化する
4. 二つの〈自然〉からなる再構成されたドゥルーズ＝ガタリの自然理論

第3章 ドゥルーズ＝ガタリの社会理論の再構成

1. 〈現社会〉から〈社会〉の生成
2. 〈単一の超越項をもった社会〉と〈多数の超越項をもった社会〉の成立
3. 〈内在項をもった社会〉と〈超越項も内在項ももたない社会〉の成立
4. 四つの〈社会〉からなる再構成されたドゥルーズ＝ガタリ社会理論

第4章 自然-社会-教育理論の構築

1. 〈発達としての教育〉の誕生

2. <発達としての教育>を超越する<生成としての教育>の誕生

3. <生成としての教育>に取って代わる<再生としての教育>の誕生

4. 三つの<教育>を内包した自然-社会-教育理論

第五章 自然-社会-教育理論にもとづく<教育>の再定義

1. 三つの<教育>は<多=一>という構造を形成している

2. <教育>とは<多=一>のことをいう——結論

3. 概要

本書が全体を通して答えようとする問いは「教育とは何か」である。冒頭に掲げられた、「[教育とは何か]という問いを定立することによって、教育について考える本書の論述を立ち上げることができる」(p.5)という問題設定に沿って、ドゥルーズ=ガタリのテキストが援用され、言葉が重ねられていく。その際の記述のスタイルは、ドゥルーズ=ガタリのテキストを注解し、解釈し、説明し、理解するのではなく、彼らの思考を著者なりの仕方で再構成する(p.30)というものであり、本書の独自性のひとつはここにある。この議論を紹介するには彼らの独特の用語を説明し、また多くのドゥルーズ研究の蓄積との比較をせねばならない。この作業は図書紹介の要素もある本稿にはそぐわないと思われる。本稿においては、第四章・第五章における結論に注目しつつ概要を示すに留めたい。

さて、本書の第四章・第五章において、著者は「教育とは何か」という問いに次のように答える。すなわち教育とは、

- ①「前人間的なことを人間に発達させる変容」
- ②「人間が超人間的なことに生成する変容」
- ③「人間が原人間的なことを経由して再生する変容」

の三つの要素からなるものである(p.188)、と。本書のサブタイトル「発達・生成・再生」に対応するこれらの変容が、教育の構成要素だとされている。

①「前人間的なことを人間に発達させる変容」とは、ヘーゲルの弁証法やピアジェの発達理論によってとらえられる変容の仕方である。まず、「人間」と

いう理想的な像が到達すべき最高の段階として打ち立てられ、続いて実在している「前人間的なこと」という低次の段階が設定される。低次から出発して高次に至るといふ、計画され、決まった道程を歩むことが発達であるとされる。近代教育学が暗に前提としてきた価値観はこれであると著者は主張する。

②「人間が超人間的なことに生成する変容」とは、ニーチェの価値転換によってとらえられる変容の仕方である。人間が超人に生成するという事態とは、普段われわれが狂気あるいは芸術だとみなす事柄にあらわれている。たとえばゴッホが、ある種発達の枠内で試行錯誤していた凡庸な画家から、突如として『ひまわり』や『カラスのいる麦畑』等を生み出す狂気に憑かれた画家になる。この変容が、「生成」と呼ばれるものである。

③「人間が原人間的なことを経由して再生する変容」とはバタイユの「留保なきヘーゲル主義」によってとらえられる変容である。遊びなど非日常的かつ非生産的な活動において、人間は自身の生を保持し留保することやめ、危険にさらし、ある種の賭けにでることがある。模倣的な死を経由することで新たな生になることが、ここでいう再生という事態である。

以上、三つの変容が、ポロメオの結び目のように関わり合っているとされる。また、発達という上昇運動と、それを直線的に突き抜ける生成、上昇運動から一旦離れまた戻って来る再生という三つ組は、全体としてみたときには「y字」の構造をとっているとみることができるとされる。教育とは、上述した三つの変容と、ポロメオの結び目と「y字」の二つの見方が成立するという「魔術的構造」と言う他ない仕方で存在しているというのが著者の結論である。

4. 本書の意義と引き出される課題

意義としては、冒頭にも記したように、本書はこれまで教育学において限定的に扱われてきたドゥルーズ（およびガタリ）の哲学を教育学的な問題圏に引きつけて論じた貴重なものである。教育学においてドゥルーズの哲学が言及される時、少なくとも国内においてこれまで中心にあったのは『記号と事件』所収の論文「追伸——管理社会について」である。この論文は、フォーコーが言うような規律社会を過去のものとし、現代においては規律が変わって

管理体制が登場してきているという旨が書かれたものである。フーコーが提示した規律権力論において、学校が権力への服従を内面化する装置として指摘されたことはつとに知られているが、これをどのように理解し、乗り越えるのか、あるいは規律社会以後の社会状況をどのようにとらえればよいのか、という問題意識の中でこの小論は必要とされてきた。本書の貢献は、このようなある種限定的なドゥルーズの受容を避け、「教育とは何か」という、大きくまた教育学の根底にある問いでもってドゥルーズ＝ガタリのテキストを再構成したことにある。

本書から引き出される課題をひとつあげるなら、次のようなものである。すなわち、ドゥルーズの哲学を教育学に導入するという目的で本書の問題意識をより引きのばし創造的なものにするためには、ドゥルーズの思索全体をふまえる必要があるという点である。これは問題点というより、本書によって提出される新しい問いである。とりわけ前期の主著

と呼ばれる『差異と反復』には、ある程度まとまった学び論を展開している箇所（第三章）があり、これと本書が扱っているガタリとの協働作業期の思考との差異を見極めることで、より総体的なドゥルーズ哲学の教育学的な理解が可能になると思われる。たとえば、著者がいうところの「人間が超人間的なことに生成する変容」は『差異と反復』における「超越論的経験」に相当し、「前人間的なことを人間に発達させる変容」は「可能的経験」に相当するものであろうか。あるいは、前期には似たような要素をなかなか見出すことのできない、「人間が原人間的なことを経由して再生する変容」の萌芽は存在しているのだろうか、またそれは「生成」することとどのような差異があるのか、等々。もちろんこの課題は著者にのみ帰せられるものではなく、「前人間的なことを人間に発達させる変容」としてのみ教育をとらえることに批判的なわれわれが引き受けるべきものである。